

2022年度 聖書講座

宗教と病

聖書的信仰の観点から

2022年11月12日(土)

① 10:25～10:30

挨拶

川中 仁

(上智大学神学部教授)

② 10:30～12:00

旧約聖書の人々は病とどう差し向かったか

並木 浩一

(国際基督教大学名誉教授)

③ 13:30～15:00

イエスの癒し— 病、穢れ、悪霊憑きについての新約時代の
見方とイエスによる癒しの救済的意味

本多 峰子

(二松学舎大学国際政治経済学部教授、
日本基督教団八王子栄光教会牧師)

④ 15:15～16:45

マタイ福音書における二人の盲人の治癒

角田 佑一

(上智大学神学部助教)

【開催方法】 会場(定員50名)+Zoomウェビナー

【会場】 上智大学中央図書館8階821会議室

【申し込み方法】 受付期間:10/1～11/6

下記申込フォームよりお申込ください。お電話での受付は行っていません。

※お申し込みの際「kiriken-co@sophia.ac.jp」からのメールを受信できるよう、
迷惑メール設定から解除、または受信設定をお願いいたします。

※申込期間以外の受付はお断りさせていただきます。ご了承ください。

(申込フォーム)

<https://forms.office.com/r/VGkJ01sYaq>



【聴講料】 お支払は銀行振り込みのみ。詳細は申込者へ別途ご案内いたします。

一般 1,000円 学生 800円

【問合せ】 ご不明点等ございましたらお問い合わせください。

メール kiriken-co@sophia.ac.jp

電話 03-3238-3540(受付時間 月曜～金曜11:00-14:00)

※開催方法、問合せ受付時間は変更になる場合がございます。

※最新情報等は研究所HPにてお知らせいたします。

※パソコンの操作についての電話でのお問い合わせにはお答えできかねます。何卒、ご了承ください。

【共催】 カトリック東京大司教区・上智大学キリスト教文化研究所

問合せ先

上智大学キリスト教文化研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

HP: <https://dept.sophia.ac.jp/is/icc/>

2022年度 聖書講座

『宗教と病—聖書的信仰の観点から』

〈共催〉カトリック東京大司教区・上智大学キリスト教文化研究所

	時間 講師 講演概要
1	10:30~12:00 旧約聖書の人々は病とどう差し向かったか 並木 浩一 (国際基督教大学名誉教授)
内容	旧約聖書の作成者はバビロニア捕囚からペルシア統治下のユダヤ州に帰還し、宗教によって民族を再建したユダヤ人たちですが、彼らは短命な人生を受け止めつつ、病と信仰に対する様々な態度を旧約聖書に記しました。対応の多様性に特色があります。祭司たちは重い皮膚病を穢れの象徴と見なしました。一般の敬虔な信仰者は病を神の怒りではないかと受け止めて、病からの回復を祈りました。イエスに縋った人々の姿勢だったでしょう。しかし知者であったヨブは病と苦難をそのまま神から下されたものと受容する一方、重い皮膚病を穢れとは認めず、苦難の原因を徹底的に神に問い質しました。またベン・シラのように、ヘレニズム期に導入された合理的な医術への信頼と伝統的な神信仰との調和を図った知者がいました。知者たちの姿勢は新約時代を飛び越えて、その後の合理的な医学と信仰の関わりを先取りするものだったでしょう。
2	13:30~15:00 イエスの癒し —病、穢れ、悪霊憑きについての新約時代の見方とイエスによる癒しの救済的意味 本多 峰子 (二松学舎大学国際政治経済学部教授・日本基督教団八王子栄光教会牧師)
内容	ユダヤの社会では、病はしばしば罪の罰、あるいは穢れ(重い皮膚病など)、悪霊に憑かれた症状などで見られてきました。特に新約の時代には病や障がい本人あるいは両親が犯した罪の罰と見られ、病や障がいを負った人は、身体的苦しみだけではなく社会的にも、罪人と見られ疎外される苦しみを強いられました。ここには、人は神の律法に従えば健康面を含めあらゆる点で幸いが与えられ、従わなければ呪われるという、申命記28章などに顕著な応報思想の影響もありました。重い皮膚病や悪霊に憑かれたような症状の人たちも、共同体の社会の外に放逐されていました。今回はそのような時代背景を考えたいうえで、病や障がいを負った人たちの身体的・社会的窮状を考察し、イエスがそのような人たちにどのように接したか、どのような救いをもたらしたかを、新約聖書のいくつかの事例で見ます。病、穢れ、悪霊憑きは異なる意味合いで理解され得るので、分けて考察します。
3	15:15~16:45 マタイ福音書における二人の盲人の治癒 角田 佑一 (上智大学神学部助教)
内容	マタイ福音書における二人の盲人の治癒に関する二つの箇所(マタ9・27-31、20・29-34)は、それぞれマルコ福音書の盲人バルティマイの治癒物語(マコ10・46-52)を編集して作成されたものである。マタイは編集の際、イエスが「二人の盲人」の目を「開く」(anoigō) 治癒行為をおこなったという内容を入れて、盲人を治癒する奇跡に新たな意味を付与している。とりわけ、共観福音書のなかで「開く」(anoigō) という語は、地上のイエスや終末における再臨のキリストの救済行為に用いられるが、マタイはこの語をイエスが盲人の目を「開く」治癒奇跡のなかで用いている。この講演では、マタイが「二人の盲人」の目を「開く」(anoigō) という編集をしたことによって、イエスの治癒奇跡にいかなる意味を付与しようとしたのかを解明する。